# 死者と語るイタコ信仰

## ―民間の〝巫女〟の姿をさぐる―

外岡信昭

### A　イタコについて―問題の所在

現宗研調査部ではここ数年『東北の宗教意識について』の調査を続けていたが、四十七年度はそれに新しく「イタコ」の実態調査が加えられ、そのおハチが私にも回ってきた。もともとイタコについての知識は皆無の私であったので、出発前までに俄勉強をはじめたわけである。イタコについて書かれた諸書中、まず私が興味を抱いたのが佐藤春夫氏の『恐山半島記』（註一）である。イタコが恐山祭典に参加したのは昭和のはじめ頃とみられているが、（註二）この戦後になって書かれた春夫氏の随筆中に、イタコのことをひと言もふれていないのはなぜか。しかも彼が下北半島に出かけたのは、恐山地蔵堂の例大祭のはじまる七月なのである。イタコがマスコミを賑すようになったのは、ごく最近のことであるが、それにしても、春夫氏はイタコの存在も知らなかったのであろうか。随筆中には県の観光課や地方事務所の役人、警察署長などと親しく話合っているが、その会話にイタコの話は出なかったのであろうか。春夫氏の崇拝者らしい青年からは？　自動車の運転手は？　また寺僧からもなにもきかなかったのであろうか。賽の河原の地獄の様子や、霊場の縁起は詳細に書かれてあるのだが……。私には春夫氏が敢えてイタコを無視したのか、まったく興味の対象にならなかったのとしか思えない。彼がそこの宿坊にひと晩泊ったとき、頭のなかを去来したのは

……ここに地獄を発見した古の高僧の情熱……。

であり、明けては、

妻の話のさびしがってゐるらしいのを聞いて同情したのでもあらうか。一行を宰領してゐたO氏は、この地の見物もすんだ。この地でお中食の予定であったが、永居も無用と思う。今から出かけて食事ならどこにでも出来る。今すぐ田名部に向ひ、二三時間を利用すれば大湊の廃港を見学できる。「つはものどもが夢のあと」を弔ふのも亦一興ではあるまいかと自分も臨機の提案を喜んで帰途をいそぐ。（傍点筆者）

のであった。知識人であった佐藤春夫氏は下北事務所が用意した、田名部町誌中の恐山縁起は面白かったのであろう

が、イタコのことはきいても忘れてしまったのであろう。またはあまりにも荒唐無稽なことなので、取巻の連中も話に出すことさえ躊躇したのかも知れない。

桜井徳太郎氏の『祭りと信仰』（註三）にも面白いことが載っている。

北津軽郡金木町は、実存的作家、太宰治を生んだところである。彼の紀行文学作品の『津軽』には、どす黒くよどんだこの地方の風土性がにじみ出ている。また義理がたく情愛の深い津軽人がよく描写されている。地理的にも本州の北端を占め、文化的には後進的評価に甘んじなければならないこの土地に深い愛情を示しながらも、どうしたことか、津軽イタコにはまったく触れていない。これをもって郷土の恥と考えたためかあるいはまた非近代的な口寄せなど、インテリ的センスがとりあげることを拒否したのであろうか。いずれにしても太宰の出生地がイタコのメッカとなっていることはまことに皮肉である。

その太宰は『津軽』のなかにこう書いている。

ひらき直って言ふまでも無い事だが、九州、西国、大和などに較べてみると、この津軽地方などはほとんど一様に新開地と言ってもいいくらいのものなのだ。全国に誇り得るどのような歴史を有しているのか。近くは明治御維新の時だって、この藩からどのような勤皇家が出たのか。藩の態度はどうであったか。露骨に言へば、ただ、他藩の驥尾に附して進退しただけの事ではなかったか。どこにいったい誇るべき伝統があるのだ。（註四）

このいささかコンプレックスの勝った、しかし誰よりも津軽の土地を愛し続けた作家でさえも、その「誇るべき伝統」のなかに、少くとも「イタコ」は入れたくなかったらしい。

この高名な、日本を代表するような二人の作家の態度は日本人のものの考え方、宗教的現象の受容のし方を知る上でも興味深いものになるであろう。

元来、宗教には聖者・教祖・高僧など宗団の中心になる人物がある反面、そこにはその教義を受け入れる一般の信者が存在する。しかし、その一般信者層に聖者・教祖・高僧の宗教的体験が、そっくりそのまま移行するとは到底考えられない。信者は信者なりに自分の体験・生活条件に照して、自分なりの宗教への参加を志そうとするだろうからである。東北調査の際、私たちはYと呼ばれる宗教教団を訪問したが、直接本部を訪れる前に、町に住む或そこの信者にお目にかかって、いろいろ信仰上の問題点などをおききした。それから本部に伺って教祖の説明される教学的なご意見をきいたわけだが、教祖と信者の間にある程度の理解の差、経験の差を認めないわけにはいかなかった。町で商売をしている信者の、生活に密着したなかから生み出さ

れていく信仰と、山中にあって教団の象徴として一派を統治していかなければならない教祖との間には、どうしてもある種のギャップを生じるのがむしろ当然である。それに時間や空間が加わり、さらにもともと人類が所持していた素朴な原始的宗教的心情が加味されれば、それは加速度的な変化を来すであろう。それが庶民信仰と呼ばれ、民間信仰と呼ばれるものではないのか。ところが識者たちは民間信仰（者）の世俗性・土着性・非合理性・その無知を軽蔑し、それをなるべく活字の文化圏の外へおこうとする。だから太宰氏も

結局は、津軽の現在生きている姿を、そのまま読者に伝へる事が出来たならば、昭和の津軽風土記として、まづまあ、及第ではなからうかと私は思っているのだが……（註五）

と書きながらも、自分の生家のすぐ近くにある川倉の地蔵講のことも、そこに行われる「イタコマチ」のことにも少しもふれないのである。その関心度は地蔵講の祭典のときに、

「なんだこんなもの。ちっともわかりゃしない」

と呟いていた村の青年のそれともあまり違いはない。しかし、ディスカバー・ジャパンなどと国鉄の宣伝があったにしても、四十七年度の下北半島恐山には約十万人の人出があり、（註六）「イタコ」に口寄せを依頼する人は年々増加しているという。この傾向をなんとみたらよいのであろうか。

註

(一) 現代日本随筆選8、『机上枕上歩上』所載、昭和二九年一月、筑摩書房

(二) 『下北の宗教』、楠正弘著、一九六八年十二月、未来社、その七八頁によれば

寛政年間に書かれた、菅江真澄の恐山紀行の中には、イタコも、行者も記録されていない。さらにイタコは、大正九年頃の祭典にも参加していない。イタコや大安寺が恐山祭典に加わるのは昭和に入ってからと考えることができる。

(三) 昭和四五年八月、新人物往来社

(四) 『太宰治全集、第八巻』、一二四頁、昭和三五年四月、筑摩書房

(五) 前掲『太宰治全集』、一二八頁

(六) 『真夏の死者の声』、毎日新聞四七年七月二一日号夕刊

## B　地蔵信仰とイタコの成立
## …「口寄せ」と修行

私たち調査グループは、四七年八月の川倉地蔵講の祭典（賽の河原祭典）に間に合うように出発し準備を急いだ。

青森県北津軽郡金木町川倉は五能線の五所河原駅から、津軽鉄道に乗換え、岩木川に平行するように北上して約三〇分。ほぼ津軽平野の中央に位置する。さきにもふれたが太宰治は自分の生れた町を

人口五、六千の、これといふ特徴もないが、どこやら都会ふうにちょっと気取った町である。善く言へば、水のやうに淡泊であり、悪く言へば、底の浅い見栄坊の町といふ事になっているやうである。（註七）

と書いている。その太宰の記念碑の立つ芦野公園を横手にみて二、三キロも行くとなだらかに起伏する丘陵地帯に目指す地蔵堂がある。これを土地の人は川倉の地蔵様と呼ぶ。

地蔵信仰が東北地方に広く行われていることはよく知られている。（註八）その地蔵様の縁日を期して、盛大な祭典が挙行されるのが、旧六月二四日の地蔵講である。もともと毎月の二四日が地蔵のアタリ日（註九）とされていて、近所の地蔵堂や地蔵様への参拝は欠かさず行われている。なるほど、注意して津軽の村々を歩くと、田圃の片隅やちょっとした丘などに馬頭観音や庚申塚とともに地蔵堂が数多くみられる。そして花が飾られ、線香が手向けられ大切に護持されていることがよくわかる。このように、地蔵菩薩に対する土地の人々の信仰はきわめて顕著である。村人と地蔵様の結びつきを物語るものとして地蔵遊びということがある。

明治の末頃の同地方では、正月の遊びをしようと、少女たちが一軒の家に集る。そこで、「田原井（地名）の地蔵さま、のりつけべえ」と相談がきまると、一人を選び、手拭で目を隠し、笹と幣束とをもたせる。そして、これを取り巻いた周囲から「南無地蔵大菩薩、おのり申せば、あそばせ給え」と唱えごとを浴びせかける。この唱えを繰り返しているうちに、真ん中の少女にがさがさ震えがきて地蔵様がのりうつる。それから何でも聞きたいことを訊ねたという。（註十）

これをみると、地蔵信仰の浸透を窺い知ることができる。と同時にイタコの発生起源にまで溯って考えた場合、面白い示唆を私たちに与えてくれる。また子供たちとの結びつきも強いものがある。筆者も金木町へ行く途中みたことであるが、数人の子供たちが明日の地蔵盆を前にして、地蔵様の石像に向って一生懸命、絵具で化粧を施している姿があった。そばに立っている大人は、それをみているだけで手伝おうとはしない。地蔵様の祭りは子供たちのものでもあるのだ。

六月二四日は旧暦であるので、今年は八月三日がその日に当っていた。川倉の地蔵堂は思ったよりも小さい。そのお堂を中心にして、小屋がけの飲食店や土産物屋が立ち並び、交通整理の警察官の天幕までも用意されている。私は

知らないが、昔の浅草や両国の盛り場もこのような雰囲気であったのだろうか。私たちは祭典の実行委員長・中谷秀四郎氏、副委員長・白川長吉氏にいろいろご教示願うこととした。

イタコの占める場所は、そのお堂の裏手、松の疎林のなかに、やはり天幕を張りゴザの上にビニールなどを敷いてその前に供物を入れる行李、蠟燭立てなどの小物を並べて客を待っている。（註十一）イタコの実態の報告をする前に、まず日本における民間巫女の概略を述べておかなければならないだろう。

死霊を呼び出し、これと依頼者との間の邂逅をとりなす民間巫女の存在は広く知られている。そして彼女らの特色は、死者の霊を招き寄せてその家族縁者に対して、死者に代ってその心意を物語る「口寄せ」を行うところにある。もちろん祈禱・祈願・卜占・八卦など、地域社会住民の要望に応えて多方面な活動を行っているけれども、これら民間巫女の巫女たる所以は、実にこの「口寄せ」を行う点に帰する。そしてその巫俗の形態から、これを「古口と新口」の二つに大きく分類することができる。

新口というのは死後一年以内の新しい仏の霊を寄せるもので、死後の日数に応じて、(1)死の当日、翌日、(2)埋葬の当日、翌日、(3)三日目、(4)三～七日、(5)初七日、(6)四九日およびそれ以上、(7)忌明け、(8)百日目およびそれ以内、(9)初盆などにわけられる。このほかに特殊な例として急病死変死、横死、幼児の早逝などの際に、とくに鄭重な「口寄せ」供養を行う場合もある。

これに対して古口は、(1)彼岸口（春秋とも）(2)盆口、(3)死者の忌日、命日、(4)年忌口（必ずしも忌口とは限らない）(5)イタコマチ、ミコ寄せ、地蔵講の際など多様である。（私たちの調査した川倉の地蔵講は古口の(5)に該当する）

この新口・古口の分布をみると、日本の南西部の奄美群島や沖縄列島ではもっぱら新口が行われ、東北の津軽や南部地方では古口が主に行われている。新口と古口を分ける際の目安としては、死後一年とも百ケ日ともいわれている。（註十二）

津軽地方では一般に古口寄せのことを「口開き」といっている。また、古口の(1)彼岸口、(2)盆口、(3)死者の忌日、命日の三種類の場合は、依頼者が巫者の家に出向き、巫家において「口開き」が執行され、オシラロ（註十三）・イタコマチそのほかは、巫者が巫家を離れて会場へ赴き、そこで巫儀を行なう。この原則とその区別はまことに厳然と守られているようだ。（註十四）

さて地蔵口についてだが、もともと地蔵菩薩のお祭りにイタコが重要な役割を担っていたわけではない。地蔵盆を期して、津軽の各地から蝟集してくる善男善女の人出を目当てに、イタコたちが自然発生的に寄ってくるようになっ

たのである。だからイタコはそこでの巫業のことを自ら「商売」と呼んでいる。こうした例は川倉のイタコマチに限らない。たとえば中津軽郡赤倉神社、大石神社、岩木山神社、南津軽郡尾上町の猿賀神社、弘前市郊外の小栗山神社、大鰐町の大円寺、北津軽郡車力村の高山稲荷などにヨセ場がつくられ盛んに口寄せが行われている。これらの社寺の多くは、ほとんどが山岳信仰などと結合した霊験性の高いもので、その効験のゆえに多数の信者を惹きつけ吸収することになる。するとそれを目当てにイタコが集ってくるのは川倉の場合と同じである。そのイタコの多くは、はじめは公許を与えられないままに境内の一隅にひそやかに口寄せの場を設営する。最初は邪魔者扱いをうけ肩身の狭い思いを続けているうちにしだいにその効験・機能が認められ、やがて堂々たる存在を自他ともに意識するようになって、はじめて公然たる地位を確保するのである。これは恐山の場合もまったく同じである。円通寺でイタコを養成したり、修行させたり、免許を出したりして組織しようとしたことはない。円通寺ではもともと現世祈禱と死者供養が催されていた。イタコの巫業の性格からいったらその両方ともに参与できそうであるが、実際にはイタコはイタコで境内の一部を借用して「商売」しているにすぎない。（註十五）

イタコになるには厳しい修行を必要とする。イタコの大部分は全盲、または半盲の女性である。東北地方の貧しい家庭の、しかも身体障害者として育った女性にどのような職業があったのだろうか。ごぜ女のように芸能を演じ、門付けしながら一生を送るか、「イタコ」や「カミサマ」（註十六）になるしか方法はなかったのではあるまいか。今日のように盲人福祉が発達していなかった昔の話である。

イタコの修行を積むには初潮期前に済ましておかないと効果が薄いといわれている。そこで彼女らは十二、三歳のころ、親元を離れて師匠につくことになる。そこで二、三年から四、五年の修行を続け、習得すべき全課程を終了したころを見はからって神憑きの式を行う。まずはじめに式の前に二一日間の精進潔斎の期間が設けられ、穀断ち、火断ち、塩断ちの行が積まれ、かつ毎朝毎晩、水垢離をとって潔斎する。こうしたのちに神憑きの式に臨むわけである。白装束に身を正した修徒がシメ縄をめぐらした道場に入り、御幣を手にして端座する。そして、これまでに教えこまれた全教科のすべての課程を復習する。断食その他の行で衰弱した肉体は、緊張の連続に堪えられなくなり、やがて、恍惚忘我の境地に入り、ついには失神転倒する。その刹那に神が憑くといわれる。そして、このときに憑いた神様が、イタコの生涯を守護する巫神となる。（註十七）この巫神は「タマシイ」とも呼ばれ終生にわたって大切に護持される。

註

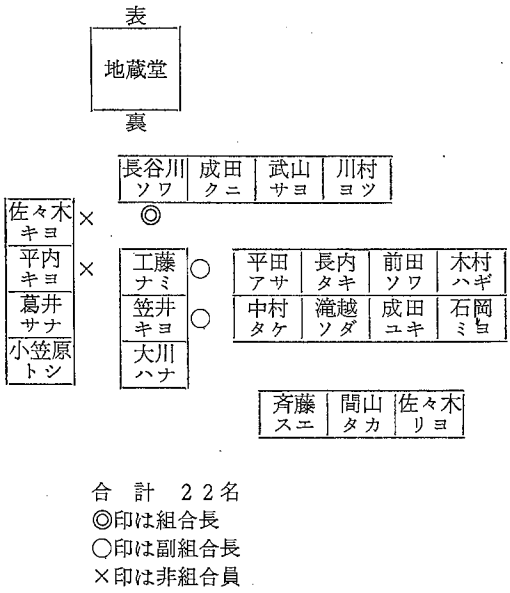
(七) 前掲『太宰治全集』、一一二頁

(八) 『日本歴史』第二六二号、桜井徳太郎氏論文、「本邦シャマニズムの変質過程」――とくに地蔵信仰との習合について――参照

(九) 前掲、桜井氏論文、一頁

(十) 前掲、桜井氏論文、三頁

(十一) 四十七年八月三日のイタコは次のような席順であった。




(十二) 川倉でインタビューしたところ、葛西サナ氏、長谷川ソワ氏は百日経たないと仏降しはやらないといい。佐々木キヨ氏、平内キヨ氏は新口の仏も降すと話した。また一年間を過ぎないと降さないというイタコも存在した。

(十三) このオシラ神は、下北では「オッシラサン」とよばれ、主として旧家の神棚に、「ヤカタ」とか箱にいれて祀られている木製の神像である。普通は毎年着せられる布切れで、幾重にもおおわれていて、その御神体は、家の人でさえ見たことのない場合が多い。オシラ神を祀っている家の数は、だいたい一部落に一、二軒で、多い部落でも五軒ほどである。しかし、津軽ではオシラ神信仰が非常に個人化していて、病気の平癒祈願のために祀られるので、一部落に五十軒、六十軒がこれを所持している。イタコの参加するオシラ口には三つのケースがみられる。第一はオシラ神をイタコの家に持参し、神下しののちオハライをしてもらう。第二はオシラ講のケースである。旧暦の三・十月十六日は十六善神の命日で、オシラ神を所持する家ではヤドをきめて集会しオシラ講を開く。ここではオシラ神をもち寄り、祭壇に飾ったのち、イタコがオシラ祭文を唱えて供養する。それをアソ

バセルとか、オセンタクなどという。そのあとで参集者たちの希望をうけて口開きをする。第三の場合は、在所でオシラ講を営まない地域で、弘前市郊外の久渡寺で旧の四月十六、七日に催される法会に参集する。この日はオシラ神に新調の紅絹の衣を着け久渡寺本堂でオシラアソバセをしてもらう。――以上、前掲『下北の宗教』、『宗教と民俗学』、桜井徳太郎著、一九七〇年一〇月、岩崎美術社、を参考にした。

(四) 前掲『宗教と民俗学』参考

(五) 前掲『下北の宗教』『宗教と民俗学』『祭りと信仰』参考

(六) 津軽地方では一般に、神事や仏事、さらに両者混淆の宗教行法に関与し、お祓い・祈禱等のことを行なう民間宗教者をカミサマとよぶ。多く病患の平癒を祈願し、厄災の退散を祈禱し、豊稔豊漁開運を祈念する。ゴミソはいうまでもないし、宗派神道諸教会の教導師、新興宗教団体の布教師、もろもろの行者はすべてカミサマである。（中略）このような性格の民間宗教者がカミサマであるから、イタコもまたそのなかに含められるはずである。ところがこれを区別してカミサマとイタコを対立的に考えているものが多い。しかも、いくぶん蔑視し、特殊視する傾向もみられる。そのため半島の東海岸地区のごとく、その称を避けてカミサマであることを主張するイタコも少なくない。イタコがカミサマと類別される際立った特色は、死者の口寄せを行なうか否かにおかれる。

前掲『祭りと信仰』、三八頁

## C イタコの構成

私たちは中谷・白川両氏から「津軽南部合同イタコ組合初代書記」の古川誠氏＝弘前市新寺町一の十三＝を紹介してもらった。古川氏は弘前身障者福祉会会員もされている方でご自身も足が不自由で常に松葉杖をともにしている。

川倉の地蔵講に参る人々は、まず地蔵堂に入り、そこに供物を供え、燈明・線香をあげ諷誦文を奉納する。これは紙でできた一種の塔婆のようなもので、土地の人はこれをフジモンと発音していた。ためしにその値段をきいてみたら先祖代々が百円、個人の仏の供養は五〇円とのことであった。これをお堂のなかで控えている僧侶に差し出して読経してもらうのである。（ここの地蔵堂は近所にある曹洞宗、雲祥寺に属していて、そこの僧侶が祭典の期間中出張してきている）桜井徳太郎氏の調査によると、昭和四十一年度の祭典の際に、諷誦文を奉納した家は次のようになっている。

五所河原市　四二三軒　青森市　七二軒
弘前市　四九軒　黒石市　一九軒
北津軽郡　九五二軒　西津軽郡　五六二軒
南津軽郡　六五軒　中津軽郡　二二軒
東津軽郡　九軒
青森県合計　二、一七三軒
県外合計　六軒
内訳　北海道　三軒　秋田県　二軒　東京　一軒
以上総計　二、一七九軒

これをみてもわかるように、川倉の地蔵講はまだまだ地元中心の祭りであり、恐山のように世俗化、観光化されていない。事実、私たちが川倉に行ったのはこの調査よりも六年もたったあとであるが、都会風の若者の数はごく稀で、若い人がいても祖父母や両親についてきたという風であり、恐山のそれとは異って祭の純粋性がそれだけ保たれていると思える。

イタコの依頼者は真剣である。イタコの降した仏の声を一言半句もききのがさじと一生懸命耳を傾ける。この日イタコは合計二十二名が「商売」をしていたが、彼女らの仏降しの祭文(註十七)と揉みこむ刺高数珠の音、涙にむせぶ老婆、地蔵堂の方から洩れてくる鉦の音、これらが様々に混淆されて祭の雰囲気は最高調に盛りあがる。そこにカンカン照りの真暑の陽。便所の臭やなにか物のすえた臭。草の香。これは東北の庶民の祭りでもあるのだ。

イタコとのやり取りはこんな調子ではじまる。

「八月十八日、男」
「あんたの亭主?」
「ハァ」
――こども(子供)たから(宝)もなァ　もすこしはなし(話)がしたくて　これはくじょう(苦情)いうことであれば　わたしがはァ　そなたのおもい(思い)にはなんというながらも　わたしもこい(恋)しいものでもあるならば　こんなにそなたにくじょう(苦情)いわれるまでもなかべしと　そなたがなみだをぼろぼろながしながら　くどきはじめたものであれば　わたしもそなたのなみだをみたならば　ともになみだをながして　もど(戻)りおきたいも　さてもおそれざんのくようさい(祭)でみたならば　なんのようたのしみであれば……なぜざんねんなたち(発)かたをしたのかとあのときは　だがいまはかえれないみ(身)であれば……」(註十八)

依頼者はもう堪らない。ハンケチで目頭を押えながら、軀を莚に投げ棄てる。なかには興奮のあまりイタコも仏もわからなくなり、霊に向って話しかけたり、ジュースを飲ませたりする。ここでの口寄せは十分か十五分位続く。終ると依頼者は一霊につき金二五〇円を支払う。(恐山では四〇〇円、南部地方では八〇円とのこと)しかし、参詣者

はこれで帰るのではない。近所の人を誘って三々五々群れ集ってきた人々は、こんどはそこかしこで弁当を開いたり、小屋がけの飲食店でなにかをとって食べる。それ自体も楽しみのひとつである。さらに暗くなると盆踊りがはじまる。そのころになると若い男女の数も増え、自家用車の列もつながる。が、この純朴な祭典にも時代の波は押し寄せてきている。もともとイタコの仲間には組織らしいものはみられなかったのであるが、昭和四十五年九月二十五日に結成されたイタコ組合もその変化のひとつであろう。当時、五所河原市の西北温泉に集った二十三名のイタコ（註十九）によって組合が結成され、その初代書記に古川氏が選任されたのであった。（ひとりあたりの組合費は三〇〇円である）この組合結成には宗教的意味はあまりない。それよりもむしろ同業者組合の色彩が濃く、より観光化・ショー化への第一歩である。各地からのイタコ派遣依頼の通信が古川氏のもとへ寄せられ、彼がそれをまとめて組合員に連絡をとる。そして、都合のよいイタコがそれに応じる。四十六年の各地へのイタコの派遣状態を古川氏の名簿にみると、それは次のようになっている。

一、弘前市久渡寺（五月十五日）　六名
二、北海道恵山（六月四日）　四名
三、北津軽郡中里町今泉地蔵様（六月二十三日）　六名
四、南津軽郡尾上町猿賀神社（八月十五日）　十二名
五、弘前市小栗山神社（八月十七日）　七名
六、種市（八月十九日）　七名
七、赤倉山第一回イタコ大会（八月二十九日）　九名
八、高野山（旧七月二十一日）　九名
九、秋田県能代市大森神社（月日、派遣人員不明）

これに恐山と川倉が加えられる。

組合に果す古川氏の役割はちょうど、芸能プロダクションのマネージャー格の仕事である。私たちも東京からきたというので、古川氏からなにかよいコネクションが東京方面にないかと頼まれたことである。さらに彼は頼まれればどこへでも出張させるとつけ加えた。

註

(十九)　「祭文」という呼称はイタコ自身が現在使っているもので、それには、オシラ神祭りの時に行なわれるオシラ神占いの直前にとなえる「オシラ祭文」とよばれるものと、口寄せのまえにうたう「仏おろし祭文（または神おろし祭文）」と、終ってうたう「仏送り祭文（または神送り祭文）」等の種類がある。しかし、普通には祭文といえば日本の伝統郷土芸能の一ジャンルの名前で、歌祭文ともいわれ、一応の概念ができ上がっている。

即ち「本来は山伏の神事用の一種の祝詞であった祭文が世俗化し音楽化して歌祭文となった」。歌祭文には普通には錫杖、または三味線を用いてリズムをつけるが、イタコはイラタカの数珠を打ち合わせたり、錫杖の柄の短いものを打ち振ったり、あるいは一対のオシラ様を両手に高くかかげ持ち、それを振ったりなどしてリズムを刻み、また、かっては梓弓を打ち鳴らしたりしたとも伝えられている。『下北・自然・文化・社会』、九学会連合下北調査委員会編、昭和四五年八月、平凡社、三〇七頁、上原陽子氏論文による。

(五) 前掲『真夏の死者の声』

(六) 組合結成に集ったイタコは次のとおりである。

①川村ヨツ　②武山サヨ　③岩崎トヨ
④木村ハギ　⑤斉藤スエ　⑥長内タキ
⑦山口トメ　⑧大屋サリ　⑨笠井キヨ
⑩小笠原ミヨ　⑪工藤ナミ　⑫林　マセ
⑬宇田アサ　⑭長谷川ソワ　⑮石岡ミヨ
⑯成田クニ　⑰霧越キワ　⑱大川ハナ
⑲前田ソワ　⑳川守田トヨ　㉑中村スワ
㉒川村ツヤ　㉓中村タケ

## D　生者と死者をとりもつ民間相談者

「ここに来て夫を呼出してもらい、泣く。その夜は境内の温泉につかって、にぎやかに歌って踊る。そして来年はだれと来ようかという相談。農家や漁師の夫は日ごろ、おまえを愛しているなんて、言葉で愛情を表現することなんかない。その夫がイタコを通して、おまえの苦労がよくわかる、体に注意しろよと声をかけてくれる。あの夫がこんな優しい気持を持っていてくれたのだなと涙を流す」（註二〇）

ここにおけるイタコは宗教者というよりも、むしろ民間よろず相談員なのかも知れない。神降しの場合は少なくとも神的な予言が付随するのであるが、仏降しはドラマティックな構成によって、死者の生者に対する感謝と、生者の死者に対する哀惜の情がこの場を支配する。生者は二五〇円也の金銭の出費によって、僅な時間ではあるが故人を偲び、また故人から励まされもする。涙を流すことによって明日からの苦しい現実生活の糧にもなる。一種のカウンセリングである。ここで生者は死者との明確な断絶を知り、仏の供養（註二十一）を通じて生を肯定する。供養を終えると思いっきり飲み、食い、そして踊り呆ける。生への讃歌でもある。お婆さんたちは僧侶の現世祈禱や読経よりもより身近なものとしてイタコを捉えている。イタコに対す

るちょっとした軽蔑の気持はあっても、僧侶や神官、カミサマに対する畏怖の念をここではもたなくてもよい。イタコはむしろ自分たちと同じ仲間である。同じ津軽弁を話す。酒を飲み、踊り呆けても、イタコは「道徳的見地からみて、どうも……」などと説教したりしない。むしろ、イタコの方からその仲間に加わってくれるだろう。

しかしこの生者と死者と、それを取り持つイタコによって醸しだされる一大シンフォニーも、いままさに崩れさろうとしている。イタコには後継者がほとんどいない。一番若いイタコで五〇代、八〇歳のイタコもいる。その人が亡くなってしまったらあとは補充できない。年々その数は減るばかりである。都会風に飾った若者たちは彼女らを軽蔑し、地元の恥ぐらいにしか思っていない。またイタコ自身は芸能タレント化され、素朴な俚人との交流を忘れようとしている。マスコミによって彼女らは有名人となり、名刺を配り歩くイタコも出現している。東北地方の社会形態の変化は、やがて大きなうねりとなって津軽にも下北にも押し寄せるに違いない。むつ・小川原湖地域の大破壊も今すぐにもはじまろうとしている。

註

(二) 前掲『真夏の死者の声』

(三) 仏を降してもらうことそれ自体が、ここでは供養と呼ばれている。

付　録

昭和四十七年八月現在のイタコ組合組合員は次のとおりである。（古川氏の名簿より転載）

①成田クニ　西津軽郡柏村大字桑木田
②霧越キワ　秋田県山本郡峰浜村字石川
③武山サヨ　弘前市新寺町一の十三
④前田ソワ　北津軽郡中里町大字大沢内
⑤平田アサ　西津軽郡鰺ヶ沢町大字七ツ石
⑥木村ハギ　北津軽郡板柳町字三千石
⑦葛西サナ　南津軽郡平賀町大字松野
⑧斉藤スエ　弘前市桔梗野町一の一
⑨長谷川ソワ　北津軽郡小泊村大字新町
⑩笠井キヨ　北津軽郡五所河原市字桜田
⑪川村ヨツ　西津軽郡森田村字吉野
⑫大川ハナ　北津軽郡中里町大字大沢内
⑬石岡ミヨ　北津軽郡五所河原市大字若山
⑭小笠原トシ　北津軽郡五所河原市大字持子沢
⑮小笠原ミヨ　八戸市尻内町字人形場一の三
⑯川守田トヨ　三戸郡福地村大字苫米地二九〇一
⑰吉田マツエ　上北郡六戸町字芝山三三の九

⑱林　マセ　三戸郡南郷村字家口四の一
⑲中村タケ　三戸郡南郷村字一の沢
⑳工藤ナミ　三戸郡南郷村字松内場四三の二
㉑長内タキ　千葉県八千代市八千代台北十五の八の七　片岡荘内
㉒岩崎トヨ　住所不明
㉓間山タカ　青森市浦町二丁目二番地三の九
㉔滝越ソダ　青森市西田沢二三九
㉕成田ユキ　青森市荒川一四四の二
㉖加藤冬子　八戸市尻内町字笹ノ沢二八
㉗佐々木リヨ　八戸市港町汐越六〇
㉘中村スワ　三戸郡名川町名久井村字名久井
㉙佐々木ユキ　三戸郡長和町ケンヨシ新開地
㉚金淵スミ　上北郡六戸町字金屋
㉛畑内ツネ　三沢市古間木町薬師一丁目
㉜板橋ミヨ　上北郡七戸町柳町
㉝立石雪枝　下北郡大畑町新町七
㉞川村フミ　八戸市鮫町字居合
㉟中村キサ　三戸郡南郷村大字一の沢